

この地にこの人あり

渇水や洪水に備えてため池を築造するためには多くの人々の関わりが必要です。しかし、その中心には、さまざまな困難や障害を乗り越え、何が何でもやり通す強い意志と、郷土への熱い思いを持った人物がいます。今回は香川県土庄町の蛙子池（かえるごいけ）を築いた太田典徳と愛媛県伊予市の大谷池を築いた武智惣五郎を紹介します。

■蛙子池と太田典徳（香川県土庄町）

蛙子池は小豆島最大のため池です。肥土山（ひとやま）村の庄屋・太田典徳（てんとく）は、日照りに苦しむ人々を救うために、天和3年（1683年）、倉敷代官にため池の築造を願い出て、翌年ようやく許可を得ることができました。銚子溪の奥地での工事は難航を極め、人夫が脱落することもありましたが、典徳は人夫の先頭に立って働きながら、資金作りのために家財や屋敷、酒造りの権利まで手放して、村人に協力を依頼して回りました。苦勞の末、3年後の貞享3年（1686年）に池が完成しました。村人は典徳の行いに感謝し、離宮八幡神社の境内に豊水分霊社をお祀りしています。〈参考資料：香川県小豆郡小学校校長会編「わたしたちの郷土 小豆島」1999年など〉



■大谷池と武智惣五郎（愛媛県伊予市）

大谷池は大谷川の上流を堰き止めたため池です。大谷川は日頃は水に乏しいものの、大雨が降れば洪水を引き起こしていましたので、大正12年（1923）、南伊予村長の武智惣五郎は大谷池の築造を発起しました。昭和6年（1931）に関係地区用排水改良工事組合を結成して翌年工事が始まりましたが、昭和9年の大水害で基礎工事が流失埋没したり、戦争による資金や資材、働き手の不足などの困難にも見舞われました。それでも、武智は率先して献身的に働き、工事は14年の歳月を経て昭和20年（1945）3月に完成しました。大谷池の堤防には武智惣五郎の功勞と徳をたたえて頌徳碑が建てられています。〈参考資料：「伊豫史談第189～191合併号」1968年及び伊豫市史編さん会編「伊豫市誌」1974年〉

